

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
138
2018.7

公益財団法人PHD協会
2018年度会報138号

ミャンマーの内戦から 生まれたシュエグニ孤児院

PHD Movement vol.21

そこは傷を負った
子どもたちが暮らすお寺、
そして、サンダーモーが帰るところ。



PHD LETTER Volume.138

Contents

- P.2-4 2018年度研修生レポート
サビナ・ビスンケ・ラムテル、レニ グスティカ、サンダーモー（モーモー）
- P.5-8 **PHD Movement** vol.21
P.5-7 ミャンマーの内戦から生まれたシュエグニ孤児院
P.8 モーモーさん孤児院の一日
- P.9 21期国内研修生自己紹介（2018年度）
- P.10 2018年度新スタッフ自己紹介
- P.11 ローターリー米山記念奨学会
- P.12 日々は東奔西走
- P.12 あなたのコレクションをアジアの未来のために活用してみませんか
- P.13 2018年度事業方針・計画
- P.14 PHD 活動紹介 2018年3月～2018年6月
- P.15 PHD News

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめて、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄（初代PHD協会理事長）と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 138号

発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒650-0003 神戸市中央区
山本通4丁目2-12 山手タワーズ601
電話：078-414-7750
FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会
01110-6-29688

表紙写真 / 2018年度ミャンマー研修生 サンダーモーさんと孤児院の女の子たち。2017年8月ミャンマー・シュエグニにて撮影。

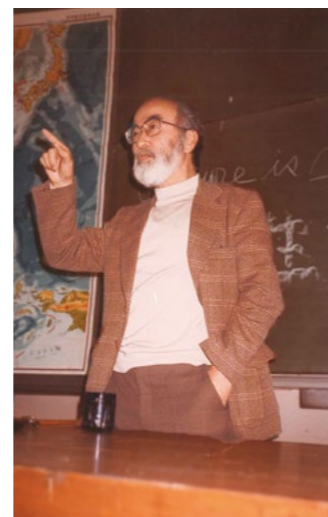
～ネパールに行くのはやめよう～

温故知新 岩村語録 その13

「1959年8月 昇の日記」聖ルカ病院の日野原先生がアップルされた、「ネパールへ医療奉仕に、とくに公衆衛生医を求めている」（中略）しかし、自分の、ネパールへ行ってみようというこの気持ちは、単なる珍しいもの見たさの好奇心であろうか。不純だ。（中略）それに医者が足りないというが、臨床医ではない。しかも公衆衛生医といっても、大学の研究室のみ過ぎてきた現場の経験のない自分のような者がいったい役に立つのだろうか。やめよう、おれのような者が出てはキリスト者医科連盟の歴史を損なうばかりだ。

「出典：山の上にある病院（1965年） P.10」

この3ヵ月後には岩村先生はネパール行きを決める。常に求めに応じて自らを準備されていた（さ）



PHD運動提唱者 岩村 昇先生



PHD 36期研修生紹介（2018年度）

高藤 真理=文

サビナ・ビスンケ・ラムテル

ネパール / 20歳



出身地はジトゥルボカリ村、大地震の激震地に隣接しており、被害が今も色濃く残っています。

村にはダリット（不可触民）*の中でも、最も地位が低いサルキと呼ばれる人たちが主に住んでいます。サルキは家畜の皮を加工し、靴を作ることを生業としていた人たちです。

サビナさんもサルキの方で、約3年前にこの村に嫁いできました。高校卒業後、協働組合で働いていましたが、お見合い結婚しました。今はハラバラという母親グループで意欲的に活動しており、加入後間もないにも関わらず周囲からの評判の高い方です。

「今もダリットだということで差別されたり、震災支援からも漏れたりする」と語るサビナさん。しかし、「ダリットには何もできない」という意見に真っ向から反論する強い心を持っています。

「日本で勉強し、帰国後は差別撲滅や女性の地位向上に向けてリーダーシップをとりたい」と力強く語ります。

サビナさんの研修したいこと

人権

日本の人権問題について学び、学んだことを活かし、村に帰ったら差別撲滅や女性の地位向上に取り組んでいきたい。

保健衛生

村の生活は、水に問題があり下痢になる人が多い。手洗いの習慣がなく、トイレ施設は作り出したところである。日々の生活で取り組むべき感染予防対策を学び、村の人に伝えたい。

農業

村の農業は、豆類やじゃがいもや葉野菜、たまねぎ、お米も作っており、自分たちの食料以外に残ったものは売っている。農業や牛糞を使用しているが作物の育ちは悪い。食べることが安心して安全な作物の作り方や収穫量を増やすことができる農業について学びたい。



滞在家族 / 金子晃司さん 洋子さん

食事はいつもおいしいと言って、きれいに食べています。食材の名前を日本語とネパール語で比較しながら会話をし、だんだん日本語会話も通じるようになりました。夕食後の食器洗いや、日曜日には自分の部屋だけでなく、リビングもきれいに掃除してくれています。庭の草刈りもサビナさんが担当したところが一番きれいになっています。家を出る時間がいつもゆっくりでひやひやすすることもあります。何事にも興味を持って取り組んでいるようです。

*ヒンドゥー・カースト制度外の被差別階層に属する人々。



PH 36期研修生紹介 (2018年度)

西スマトラ州ソロ郡カユジャングイ村から4人目の研修生。州都パダンからバスで3時間程行った山村で、人口約900人200世帯。熱帯ですが標高約1,100mに位置しており、朝晩は肌寒いほどです。

レニさんは7人兄弟の4番目。高校卒業後、近くの町のお菓子屋などで働いた経験を持ちますが、「やっぱり村が好き」と帰ってきました。村ではモスクで子どもたちにコーラン(イスラムの聖典)を学ぶために必要なアラビア語を熱心に教えており、地域での信頼が厚い方です。

研修希望内容としては「歯」。家族をはじめ周囲にむし歯で苦しんだことがある人が多く、高校生の時から口腔衛生に強い関心を持っています。

レニさんは明るく積極的な女性です。自己分析では「勤勉、自信家、かつ恥ずかしがり屋」、趣味は歌。帰国後は地域で活躍しているPHD研修生たちのように地域の発展に寄与することが目標です。

レニさんの研修したいこと

保健衛生

村の人たちの健康問題で多いのは、下

痢や腹痛、咳である。村には診療所がないため、日頃の予防が重要である。どのようにすればこれらの症状を回避できるのか、またこれらの問題を減らすことができるのか、日本の健康管理について学び村の人に伝えたい。

口腔衛生

村の人たちはむし歯を持っている人が多いが、歯科診療所はなく治療ができない。なぜむし歯や歯周病になるのか、なぜ歯や口の健康は大切かを勉強し、村の人に伝えたい。

保育・幼児教育

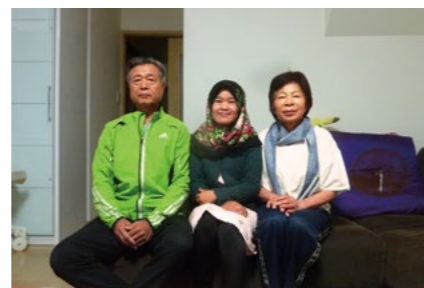
将来は村の保育園の先生になりたい。そのためには大学に進学しなければいけないが、日本の保育や幼児教育について、具体的な手法や目的を学び村の保育・幼児教育に取り入れたい。

洋裁

村には洋裁ができる人が少ない。ミシンの技術や裁縫を学び、服が作れるようになりたい。それは村のためにもなるが、自身の収入源の1つにもつながる。

レニグスティカ

インドネシア / 20歳



滞在家族 / 宝田 和正さん てるみさん

また今年も家が明るくなりました。孫もたくさんおり、家に遊びに来ることも多く疲れることもあると思いますが、よろしくお願ひしますね。おはしも上手に使っています。嫌いな食べ物もおつゆで流し込んで頑張ってお食べしてくれ。畑の仕事や洗濯干し、掃除も手伝ってくれるので助かっています。



サンダーモー (モーモー)

ミャンマー / 30歳

マンダレー近郊にあるお寺が集まるタムルコ山にあるシュエグニ孤児院からの招聘です。

お寺の住職が国境付近の内戦孤児や被害者を受け入れ約5年。今では100名前後の孤児が暮らす孤児院となりました。

サンダーモーさんはこの孤児院で24時間体制で働いています。朝は4時に起き、年長の尼さんと100名分の食事を作り、昼は孤児に勉強を教え、夜は年少の尼さんと小さなスペースで寝るという生活をずっと続けています。その献身ぶりにはモーママさんはじめ今までの研修生たちも「私には真似できない」と口を揃えるほどです。

日本では孤児院で役立つ教育や保健衛生を学びたいと語ります。孤児院では皮膚病やむし歯の問題、教育の質の向上などが課題です。

研修生に決まった瞬間、涙したサンダーモーさん。理由は「日本で学べる嬉しさ半分、子どもたちと1年間離れる寂しさ半分」と多くの想いを背負っての来日です。

サンダーモーさんの研修したいこと

保健衛生 口腔衛生 栄養管理

子どもたちの皮膚病や体調不良のことが気になる。バランスのよい食事や体を清潔に保つことが影響していると感じているが、どのようにしたらよいか分からない。

子どもたちの健やかな成長を促せるよう、栄養管理と体調管理を学びたい。また、むし歯や歯肉炎のことも子どもも多いので、口腔衛生について学びたい。

教育

孤児院での授業は、小学校から中学校の内容について教えなくては行けないが、カリキュラムや授業内容の組み立て方を学びたい。また、子どもたちに勉強への興味を持って欲しいが、どのような授業を行えば勉強に興味を持ってもらえるか知りたい。そして、孤児院の他のスタッフにも教授法を伝えたい。

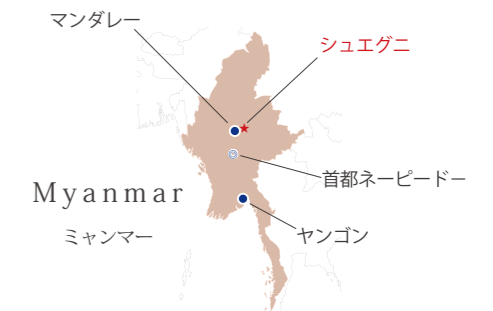
国語や数学、英語といった科目の教授法に加え、絵を描くことが好きな子どもたちのため、芸術に関する科目についても教授法を知りたい。

PH 36期研修生紹介 (2018年度)



滞在家族 / 黒野 美代子さん

昨年のスタディツアーで、サンダーモーさんの研修生選考に立ち会うことができました。その時から、ホストファミリーをぜひ受けさせていただきたいと思っていました。彼女が日本での研修を通して、シュエグニの子どもたちにどのようなことをしていけばいいのかを考える手助けができればと思っています。日本語が難しいと言っていますが、寝る間も惜しんで勉強しています。

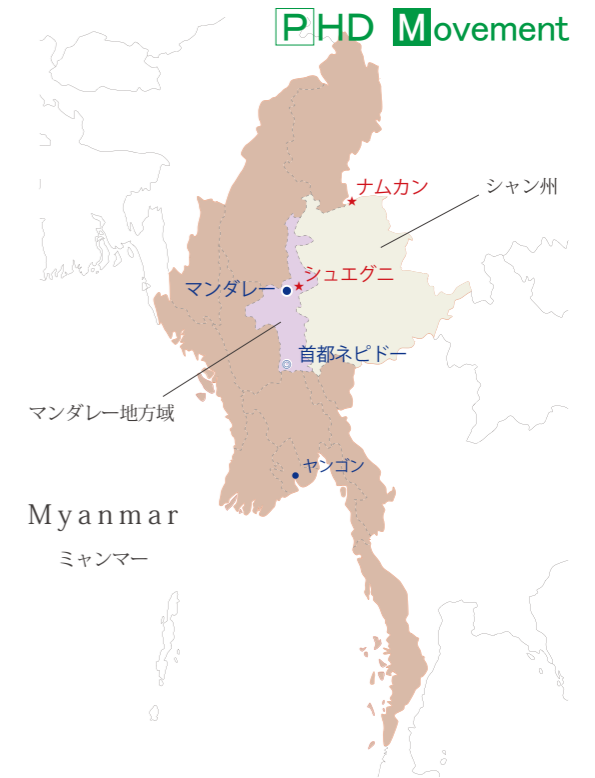




シュエグニ孤児院の女子(尼僧)用宿舎。モーモーさんはここで女の子たちと寝起きを共にしています。



シュエグニ孤児院にて、子どもに語りかけるサンティダエーさんとモーママさん(写真左:2015年度研修生)とモーママさん(写真中央:2013年度研修生)。



PHD Movement vol.21

ミャンマーの内戦から生まれたシュエグニ孤児院

2018年度研修生として、シュエグニ孤児院からサンダーモーさん(以下、モーモー)を招聘している。ここで改めてPHD協会とシュエグニ孤児院のつながりをご報告させていただきます。

孤児院との偶然の出会い ～モーママさんの想い～

起点は2013年度研修生モーママさんである。モーママさんが日本での研修を終えて帰国後すぐのこと、彼女の叔母でもある、2015年度研修生サンティダエーさんのお母さんが別のお寺に行くこととして迷いこんだのがシュエグニ孤児院である。そこであまりの窮状に驚き、お米を寄進することを約束。その寄進の際にモーママさんも同行し、「とても可哀そう」と感じたそう。そのモー

ママさんの手には当会から手渡した活動支援金約5万円があった。実は彼女は活動支援金で薬屋を始めるというプランを持ち帰っていた。しかし、孤児院のあまりの窮状に驚き、子どもたちのために何かしたいという想いに駆られたそう。彼女が選択したのは、その5万円を使って子どもたちの為に御馳走とアイスクリームを食べさせてあげること、そして口腔衛生のレクチャーのための歯ブラシを支援することであった。曰く「子どもたちは質素なご飯しか食べていなくてとても可哀そうだった」、アイスクリームも加えることがお菓子好きな彼女らしい。とはいえ、孤児院に約100名分の食事やアイスクリームを届けることは容易ではない。料理が上手な村の叔母さんたちに声をかけ、朝早くから準備し、車に人数分を乗せて運搬する。食材や車の手配、

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

多くの人を巻き込むことも必要であったが彼女はそれをやり遂げた。

しかし、その後、彼女は新たな課題に直面する。それはPHD協会への報告である。既述のように彼女のプランは「薬屋」であった。そこから逸脱した使い方をしてしまったことで、彼女は困り果てていた。同年(2014年)のスタディツアーの最終日に恐る恐る報告してきた彼女の様子とその後にホッとした表情が忘れられない。もちろん彼女の行為に咎があるはずもない。よってPHD協会としてはその年からモーママさんを通じて間接的にシュエグニ孤児院との関係性が始まり、翌2015年にPHD協会として正式に訪問させていただき、4年後の今年のモーモーさんの招聘という実を結ぶことになった。

【 シュエグニ孤児院概要 オウタラー住職インタビュー 】

次にシュエグニ孤児院についてまとめておきたい。便宜上、孤児院と表現しているが、元々はお寺である。以下、お寺のご住職であり、モーモーさんのお兄さんに2018年3月にインタビューした内容である。

お寺の名前:シュエグニ・パラヒタ

住所:ミャンマー・マンダレー地方域パティンジー町ナンジェ村

代表:オウタラー住職(43歳)、モーモーさんの兄

スタッフ数:5名、モーモーさんがメイン、サブが1名。残り2名は通い。

孤児院の設立:2013年

住職はいつからここに?:17年前(2001年)から住んでいました。

子どもたちを預かり始めたのは?:2013年から。

最初は何人?:最初は40名ほど。

この活動を始めるのは勇気がいるが怖くなかったか?:恐怖は当然ありました。ただ勇気がたくさんありました。私も小さい時は貧しかったので、「なんとかしたい」という強い気持ちがありました。私は僧侶なので、寄付する人がいなくても托鉢でなんとかできるだろうと考えた。

子どもたちの民族:パラウ民族が多い。シャン民族、ビルマ民族もいます。

子どもたちはどこからきている?:ナムカン。内戦がある中国との国境沿いの地域。

ナムカンから孤児院の距離は?車どれぐらい?:孤児院から約1日、24時間前後かかる。

子どもたちはどうやってナムカンから来ている?:民間のバスで来ている。(P.7へ続く)



シュエグニ孤児院創立者、オウタラー住職。住職とモーモーさんは兄妹です。



(P.6からの続き) ナムカンで最初だれが子どもたちを保護するのか?: パラウン民族である友人の僧侶。子どもたちが内戦の被害で困っていた。だから私に相談があり、受け入れることになった。最初はトラックで子どもたちは来たので、マンダレーまで迎えに行った。

もし子どもたちをシュエグニに連れて来なかったら子どもたちはどうなったと思う?: 子どもたちは困難な状況に置かれたままになる。勉強もできないし、生活も困難な状況と聞いている。

ナムカンにいるとどうして勉強ができない?: 内戦があるから。学校も無いか、機能していないと聞いている。

子どもたちは危険な状況にあるのか?: 子どもたちも地雷や戦争の被害にあうことがある。

友人の僧侶とはどういう関係?: ラーショーで住んでいた時に会った、パラウン民族の僧侶。

ナムカンではどの勢力間で衝突が起きていますか?: シャンとパラウン、ミャンマー国軍とシャン、パラウンとミャンマー国軍の三つ巴。

モーモーさんには何を勉強してほしい?: 教育と保健。日本はそれらがよいと思うので。

孤児院での教育の課題は?: 民族が違うので、モーモーを含めた先生は子どもたちの言葉がわからない、生活習慣もわからない。子どもたちはビルマ語がわからない。ビルマ語とパラウン語の通訳をする。

子どもは実際に何人?: 75人。本当は80人以上、今は一部一時帰宅している

孤児院に住む子どもたちに親はいるのか?: 様々だ。でも、片親だけの人が多い。戦争、病気、麻薬などで亡くなったか。

子どもたちの年齢は?: 5歳から16歳。高校に行つて勉強をしている子どももいる。学校のお金は僧侶が出す。高校生になり帰る人も、仕事する人もいる。内戦に参加する子どももいる。15歳、16歳から戦争に参加できる。ここから故郷に帰って戦争に参加する。

戦争に戻る子がいることをどう感じているか?: 心が痛くなる。パラウンは各家庭から一人は参加しないとけない、戦争に。シャンもカチンも同様の習慣があるので、戻るといことは戦争に参加する確率が高い。



シャン州に展開するミャンマー国軍の車列。(2003年7月31日撮影)
©2018 宇田有三 Yuzo Uda

【孤児院を取り巻くミャンマー情勢】

ミャンマーは人口の約70%を占めるビルマ民族とその他多くの少数民族からなる多民族国家です。残念ながら民族間の鋭い対立のため、国軍と少数民族の武装組織による内戦が続いてきました。

こうした内戦による不安定な情勢のため、ミャンマーは長く軍事政権の統制下にありました。これに対し、アウン サン スーチー氏率いる国民民主連盟 (NLD) を中心とする勢力が民主化運動を続けてきました。そして数十年にも及ぶ長い運動の結果、2015年11月の総選挙においてNLDが大勝利、2016年3月にはアウン サン スーチー氏の主導する新政権が発足しています。

一方で、2008年制定の憲法には国軍司令官が議会定数の4分の1を指名する規定があります。国防と治安部門が国軍の掌握下にあることと合わせ、完全に民主化されたとは言えない状況が続いています。

不完全な民主化ですが、その動きにあわせ、一部の武装組織と政府の間で平和に向けた動きも進展しました。しかし、シャン州などでは国軍と武装組織の間で現在も断続的に戦闘が発生しています。

シュエグニ孤児院に暮らす子どもたちの民族「パラウン」にも自治権拡大を目指し、政府と対決している組織が存在します。最近では2018年5月シャン州北東部において、その組織の軍事部門「タアン民族解放軍」と国軍の武力衝突が起きています。



PHD Movement
モーモーさん
孤児院の一日

男の子(僧侶)用の袈裟を干すモーモーさん。頻りに洗濯をして清潔に保つ努力をしていますが、孤児院では皮膚病などの衛生上の問題を抱えています。



早朝の托鉢に出かける子ども。

モーモーさんと子どもたちの一日	
3:30	起床、身支度
4:00	子どもたちを起こす 100名分の朝食準備
6:00	子どもたちの朝食 →子どもたちは托鉢へ
8:00	朝食
8:30	昼食の準備
9:00	授業(ビルマ語、英語、算数)
11:00	子どもたちの昼食
12:30	昼食
13:00	授業(ビルマ語、英語、算数)
17:00	休憩、夕食準備、買い出し等
19:30	夕食
20:00	就寝準備
21:00	子どもたちと就寝

モーモーさんの一日は早朝起きて、眠るまで、いえ、眠っている時ですら子どもたちと一緒にでした。

日中は寮母として食事の準備や健康管理を担うとともに、先生として子どもたちに勉強を教えていました。

そして日の終わりには、幼い子どもたちと一緒に眠りにつきます。自分たちの置かれている状況が理解できず、

辛い夜を過ごしている幼い子どもたちもいます。モーモーさんは彼女らの傍らに、一晩中寄り添います。

寮母や先生であると同時に、モーモーさんは子どもたちにとって、母親なのかも知れません。



- ① 昼食の準備。手際よく100人近くの食事を準備します。
- ② 先生として教壇に立つモーモーさん。
- ③ 幼い女の子たちの宿舎。モーモーさんはここで彼女たちと一緒に眠ります。

21期国内研修生自己紹介(2018年度)

21期国内研修生の活動は、国際協力研修生として「平成30年度公益信託兵庫県婦人会館ユネスコ基金」に支えられています。

遠藤 響子

研修担当



初めまして、大阪女学院大学3回生の遠藤響子です。2017年度国内研修生吉村さんの後輩にあたります。大学では国際協力や国際コミュニケーションについて勉強しています。学校から2017年のミャンマースタディーツアーに参加し、初めて近くでNGOの活動に触れることができました。帰国した研修生が村で活躍しているのを見て、その姿に感動しました。そして国境を越えたPHDと村の人たちとの素敵な関係に惹かれ、もっと活動に近づきたく、2018年度の国内研修生に応募しました。国内

研修生として、2018年度PHD研修生をサポートし、彼女らの成長を間近で体験したいと思います。

私自身もこれから1年間PHDで、たくさんの方の事を学びたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

他己紹介 高藤 真理

2017年度のスタディーツアー(ミャンマー)で初めて出会った私たち。「彼女は来年度の国内研修生」と勝手に心の中で決めていましたが、

期待を裏切りませんでした。持ち前の素直さと大らかさで、個性豊かな研修生や個性豊かなスタッフとも仲良く過ごしています。

未来のえんちゃんがどのような姿になるか、大変楽しみです!



清水 悠加

広報・啓発担当

はじめまして、神戸大学国際文化学部4回生の清水悠加です。大学では平和構築論のゼミに所属しています。ゼミにおいて紛争解決アプローチや国際協力について学んでいく中で、現地を実際に見てみたいと思うようになりました。そんな中、JICAのプログラムでインドを訪れたのをきっかけに、国際協力には様々なアクターがあることを知りました。なかでも現場に近いNGOの活動を近くで学びたいと思い、PHDの国内研修生に応募した次第です。特に教育や人材育成の分野に興味があるので、自分もPHD研修生たちと一緒に1年

間学んでいきたいです。

広報・啓発担当として、多くの人に国際協力について知ってもらい、周りの人も巻き込めるような活動をしていきたいと思っています。これから研修生たちの様子やPHDの活動をSNSなどを通じ、積極的に発信していきます。1年間どうぞよろしくお願いいたします。

他己紹介 八木 純二

頼んだことは手際よくこなしてくれる清水さん。大学を1年間休学し、スペイン・バルセ

2018年度新スタッフ自己紹介

PHD協会では多様な働き方の実現を目指し、いままでPHDに関わっていただいた皆さんに新しいスタッフとして加わっていただきました。

中西 美樹

主事補 / 総務・ファンドレイジング担当

青年海外協力隊として2010年にインドネシアに3ヵ月、2012年からベトナムに2年赴任していました。インドネシアではPHD研修生と同じ州で活動し、PHD活動にご縁を感じています。これまでは助成金担当でしたが4月から総務としてお仕事をさせていただきます。よろしくお願いいたします。



酒井 萌乃

NGO インターン・総務担当

外務省NGOインターンプログラムに採択され6月からインターンとして働かせていただいています。兵庫県の篠山出身で山と田んぼに囲まれた大自然の中で育ち、現在は大学院で途上国の栄養問題を勉強しています。PHDで働けることに感謝し、実り多い時間を過ごしたいと思います。



芳田 弓生希

嘱託職員 / 研修担当

自分の生き方の軸となるものを与えてくれたPHD協会で再々働く機会をいただきました。自分の半分をPHD協会で働くことに、残りの半分は当会で学んだこと、感じたことを自分なりに実践するために使うという、わがままで贅沢な暮らし方をさせていただき感謝しています。

芳田弓生希(写真左)
川原桂(写真右)



高藤 真理

主事補 / 研修担当

4月から、研修兼口腔衛生担当をしております。年齢はあまり若くない新人ですが、よろしくお願いいたします。PHDは研修生を含め大家族のような、そして当会のご支援者の皆さまとの出会いとつながりを加えますと、1つのコミュニティのように感じています。



濱 宏子

嘱託職員 / 人事・米山記念奨学生担当

インドネシア語通訳ボランティアとしてPHD協会と出逢い、これまで沢山の研修生と関わり早や7年が経過しました。この度、お仕事として研修生と関わる事となり、深い縁を感じております。今後は米山記念奨学生担当としてロータリークラブとPHDを繋ぐお仕事をさせていただきます。

川原 桂

嘱託職員 / 広報・啓発担当

はじめまして、そしてご無沙汰しています。5年半ぶりに復職させて頂きました。以前担当していた啓発・フェアトレード業務を担当します。現事務所での業務は初めてで緊張気味ですが、PHDの活動の深さを沢山のの人に伝え、PHDに繋がる人たちを増やしていきたいです。

ロータリー米山記念奨学会

2018年度も米山記念奨学生としてPHD協会の研修生3名を受け入れていただきました！

濱 宏子=文

◇ 2018年度のお世話クラブとカウンセラーの方々 ◇



西村 雅文さん
加古川中央ロータリークラブ

サビナさんのカウンセラー



徳永 順一郎さん
川西ロータリークラブ

サンダーモーさんのカウンセラー



堀 成志さん
篠山ロータリークラブ

レニさんのカウンセラー

研修生たちは月に1度、お世話になっているそれぞれのロータリークラブの例会に出席させていただいています。それぞれのクラブには個別にカウンセラーさんが付いてくださっており、研修生たちは(日本のお父さんと呼び)1年間親交を深めます。今年も3つのロータリークラブが受け入れて下さっていますのでご紹介させていただきます。

ネパールのサビナさんは加古川中央ロータリークラブ。今年は加古川市議会議員の西村さんがカウンセラーです。

サンダーモーさんは例年ミャンマーからの研修生を受け入れてくださっている川西ロータリークラブ。カウンセラーは徳永先生。川西で小児歯科医として広く活躍されています。歯の健康を学びたいサンダーモーさんの強い味方になって下さいませ。

そして篠山ロータリークラブでは前年に引き続きインドネシアのレニさんがお世話になります。カウンセラーは堀さん。先日は篠山城跡を中心に情緒漂う篠山の町を案内していただき、その歴史や文化に触れたレニさんが歓声を上げていました。

どのロータリークラブでも来日したばかりの研修生たちに気を使って優しくして下さい、村の様子や日本の感想を尋ねて下さって、慣れない日本にもスムーズに入っていく事が出来ます。研修を終え日本に慣れた頃からはコミュニケーションも益々取れるようになり、ロータリアンの皆様は研修生にとって欠かせない存在となっております。本年度もどうぞよろしくお願い致します。

日々是 東奔西走

研修担当
高藤真理

『PHD協会と 出会った!私』

私が、PHD協会と出会ったのは2016年1月です。その後、

研修生の口腔衛生と防災研修の指導者、宴会友達をさせていただいておりました。現在はその頃と180°立場が変わった訳ですが、ボス(坂西)から「態度がでかい」(冗談だと思います)と言われるくらい馴染んでいる?!ようです。

さて、私は歯科衛生士を20年余りしております。臨床や教育現場で働きながら、海外の無歯科地区の歯科支援や国内の被災地で活動を行っていました。専門でいうと、口腔衛生と防災教育になるでしょうか。現在も、事務所不在の日は障害者歯科で活動をしています。障害者歯科と防災という2つの取り組みを通して、見えてきたものがあります。「インクルーシブ(inclusive:包括的な)」です。

「生きるとは分かち合うこと」という岩村先生の言葉は、私が初めて事務所に足を運んだ理由の1つです。共に生きるということとイン

クルーシブは、私にとって1本につながっています。

研修生は一大決心をして来日したと思います。研修生の村から学ぶことも多くあります。私は、研修生の日本での学びを共に「観て聴いて感じて」進めていきたいと思うと同時に、お互いの地域がよりよい状況に進むヒントを一緒に見付けていきたいと思っています。



防災研修：神戸常盤大学(2016年10月撮影)

国際協力研修生

国際協力研修生の活動は、「平成30年度公益信託兵庫県婦人会館ユネスコ基金」に支えられています。

中西美樹=文

PHD協会は兵庫県内の国際感覚豊かな青少年の育成を行う団体として、「平成30年度公益信託 兵庫県婦人会館ユネスコ基金」の助成を受託しました。この助成のもと、2018年度国内研修生は「国際協力研修生」として、PHD研修生との交流及び研修を通じ、国際感覚を育みます。また、国際協力研修生は、兵庫県下の高校や大学などで、国際理解を深め、国際交流の場を提供するために、複数回にわたって研修会を開催する予定です。

国際協力研修生は彼女ら自身のみならず、その活動を通じて、兵庫県下の多くの青少年の国際感覚を育むことを目的とした事業です。



上写真/国際協力研修生の清水悠加さん(写真左)と遠藤響子さん(写真右)

右写真/神戸YMCAにて日本語を学ぶPHD研修生に付き添う遠藤さん(写真右端)



あなたのコレクションをアジアの未来のために活用してみませんか。



ご寄贈いただいた江並先生の切手コレクションの一部

2018年5月に歯科医師の江並正博先生より、切手コレクションをご寄贈いただきました。江並先生はミャンマーの口腔衛生向上に尽力されるなど、国際協力の分野でも活躍される一方、終身会員として長くPHD協会をご支援いただいております。今回のご寄贈は亡

くなられた奥様の收藏品とあわせ、総額200,000円相当の大変貴重なものでした。江並先生には心よりお礼申し上げます。

PHD協会では、こうした切手や古紙幣古銭のコレクションのご寄贈を承っております。また、書き損じや未使用

【使用済み切手の消印に関して】

使用済み切手を紙から切り離す際は、消印部分も切手と一緒に切り、送付ください。



八木 純二=文

ハガキ、使用済み切手や未使用切手、外貨紙幣などがご自宅にごございましたら、どうぞPHD協会までお寄せください。アジア・南太平洋地域の草の根の人々の未来につながるよう、換金いたしまして、PHD協会の活動資金に活用させていただきます。

PHD News

兵庫県における公益財団法人への寄付控除が拡大

2018年1月1日以降の兵庫県民からの公益法人への個人寄付について税額控除の率が次のように変更されました。兵庫の公益法人の仲間たちと取り組んできた成果が実を結びました！

寄付額－2,000円をXとして

	税額控除の率		備考
	変更前	変更後	
所得税 (国税)	X × 40%	X × 40%	変更なし
県民税	適用なし	X × 4%	※神戸市民の寄付については2%
市町民税	神戸市、多可町など いくつかの市町のみ (X × 6%)	神戸市、多可町など いくつかの市町のみ (X × 6%)	※神戸市民の寄付については8%
(合計)	X × (40%もしくは46% もしくは48%)	X × (44%もしくは50%)	※市町による

出典：(公財) ひょうごコミュニティ財団

PHD SAVE NEPAL

ネパールPHD研修生里親 第2期募集

ネパール大震災から約3年。今もなお被災地で奮闘する研修生たちをサポートいただける里親を募集しています。

ネパールPHD研修生里親制度

**里親 1年間1口
50,000円より募集**

**研修生 1年分活動費
250,000円(5口分)**

研修生活動費の目安は年間給与として、2万円×13ヵ月。(伝統祭祀の際の支給賞与を含む。) 管理費はPHD協会負担。

第2期として募集するのはランマヤさん、ムクさん、カンチさんの3名になります。1口5万円。ご興味のある方は事務局までお問合せ下さい。



里親募集中ネパール研修生
ランマヤさん 2012年度(左上写真)
ムクさん 2014年度(右上写真)
カンチさん 2015年度(左写真)



詳細はPHDのホームページをご覧ください。

PHDで働いてみてor復職してみても月×日のPHD協会

職員 芳田 3回目の新職員。啓発から憧れの研修担当になり、車の運転も。道を考えていると「道わからない?」と研修生からチクリ。間違っへんもん。

インターン 酒井 女性職員が年齢不詳。疲れが見えなくて、服装が小奇麗だから?私はお洒落は面倒、買うのも着るのも。理想は裸族、なぜ人は服を着るのか?

職員 中西 ご縁が面白い。元はボランティアだった私、帰る際に職員に見送られ恐縮されていたのを思い出す。今は逆に見送る側。不思議です。

職員 川原 5年半ぶりの復職。第一印象は「PHDって若い」。服装を見てもボーダーがない。「40代以下はボーダーを着ない」説も?いつの間にか、

職員 高藤 チーム感が心地よい。前職は大学で個室。「どうしたらいい?」と呟いても返事なし。今は意見が温かいシャワーのように帰ってくる。

職員 濱 ロータリー例会出席が主たる仕事に。美食と紳士の皆さんの優しさに囲まれ幸せ。食後の珈琲にミルクまで入れてくれるなんて。私の天職?

以上、睡眠時間が長そうな順

平成30年度 外務省「NGO事業補助金事業」

平成30年度 外務省「NGO相談員制度」

平成30年度 外務省「NGOインターン・プログラム」

平成30年度 公益信託兵庫県婦人会館ユネスコ基金

2018年度のPHD協会は上記の助成を受けて、事業を運営しております。

BE KOBE

PHD協会は阪神・淡路大震災20年を機に生まれた「BE KOBE」の理念に賛同し、神戸を拠点とする団体として誇りを持って活動してまいります。